

## 惟仲・生昌年表（三）

## 高橋由記

【凡例】

一、この年表は平中納言惟仲および、その弟・大進生昌の動静を史料等から抜いたものである。原則として惟仲・生昌の名前の記載のあるものは、記事の重要性如何に関わらずすべてを抜き出した。その他惟仲の妻・繁子、繁子と道兼の子・尊子についても出来る限り年表に取り込んだ。

二、参考資料は次の通りである。

小右記（大日本古記録）・権記（寛弘七年までは「史料纂集」、それ以降は「増補史料大成」）・御堂閔白記（大日本古記録）・公卿補任（国史大系）・職事補任（群書類従）・国司補任・藏人補任・弁官補任・日本紀略（国史大系）・扶桑略記（国史大系）・百鍊抄（国史大系）・本朝世紀（国史大系）・一代要記（改訂史料集覽）・平安遺文・類聚符宣抄（国史大系）・正倉院文書・北山抄（増訂故実叢書）・東大寺別当次第（群書類従）・榮花物語（新編日本古典文学全集）・平安朝歌合大成

また、どの資料によつたのかは、原文の最後に載せた。

惟仲・生昌等の記述の部分には、私に傍線を施した。

三、日記等の史料に関しては原文をそのまま載せた。また、同日の資料もすべて載せた。縮小文字・割注は、すべて縮小文字とした。

四、閏月は○数字とした。たとえば閏一月は①、閏十二月は⑫と記載した。

た。

五、異体字は通行字体になおした。

六、年表に関しては、左上に通しのページ番号を付けた。(三)は、通し番号21と32(長保元年と四年)である。

なお、年表の（一）（二）は以下のものに掲載した。

惟仲・生昌年表(一) 『瞿麦』第四号 平成八年十二月

『瞿麦』第五号 平成九年四月

年 号	長徳五 = 長保元 (九九九)																																	
天皇	一条																																	
歳	56																																	
月 日	<table><tr><td>正月</td><td>30</td><td>中宮大夫。【公卿補任】</td></tr><tr><td>2 9</td><td>癸巳。中納言平惟仲卿。參議藤原忠輔朝臣着行座聴政。</td></tr><tr><td>2 11</td><td>乙未。……巳刻。大納言藤原懷忠卿。中納言同時光卿。</td></tr><tr><td>2 19</td><td>癸卯。中納言平惟仲卿。參議藤原誠信卿。同公任卿着行座聴政。【本朝世紀】</td></tr><tr><td>2 20</td><td>甲辰。今日。廿余社奉幣。仍有八省院御座之事。左大臣(道長)。右大臣(公季)。大納言藤原道綱卿。中納言同時光卿。平惟仲卿。參議藤原懷平卿。同忠輔朝臣。同參議藤原平惟仲卿。參議藤原育信朝臣着行座聴政。【本朝世紀】</td></tr><tr><td>2 22</td><td>丙午。中納言平惟仲卿。參議藤原育信朝臣着行座聴政。【本朝世紀】</td></tr><tr><td>2 27</td><td>辛亥。……同時參口(奉七)日、女軍、同道上達部民部卿(藤原懷忠)、中宮大夫(平惟仲)、藤宰相(懷平)、左衛門督(藤原誠信)、宰相中将(藤原春信)、修理大夫(源俊盛)等。【御堂閤日記】</td></tr><tr><td>3 9</td><td>壬戌。午後。左大臣(道長)。右大臣(頭光)。大納言源時中卿。藤原道綱卿。中納言同時光卿。平惟仲卿。參議藤原公任卿。源俊賢朝臣着左仕座。【本朝世紀】</td></tr><tr><td>3 16</td><td>己巳。……巳一刻。左大臣(道長)。内大臣(公季)。大納言源時中卿。藤原道綱卿。權大納言同懷忠卿。中納言同実資卿。平惟仲卿。參議青原輔正卿。藤原誠信卿。同公任卿。同忠輔朝臣。同參議朝臣。源俊賢朝臣參入内裏。【本朝世紀】</td></tr><tr><td>3 20</td><td>癸酉、候仁王会、依御物忌、他公卿不候、外宿上達部候南殿(行事上右大将(藤原道綱)依有障、中宮大夫(惟仲)行之、事了退出。【御堂閤日記】</td></tr><tr><td>3 20</td><td>癸酉。天晴。今日臨時仁王会也。仍無尋常政。巳刻。</td></tr><tr><td>3 23</td><td>昔原輔正卿。藤原誠信卿。同公任卿。同参議朝臣。内裏参入行之。【本朝世紀】</td></tr><tr><td>7 23</td><td>丙子。天晴。上卿进参。仍無政。午後。中納言藤原実資卿。平惟仲卿。参議青原輔正卿。藤原誠信卿。同忠輔朝臣。同参議朝臣。源俊賢朝臣着左仕座。【本朝世紀】</td></tr><tr><td>7 27</td><td>庚寅、御諮經案願、依御物忌親候公卿余、民部卿(懷忠)、大(大)、皇大臣大夫(実資)、中宮大夫(惟仲)、宰相中将(春信)、源宰相(実資)等也。【御堂閤日記】</td></tr><tr><td>7 27</td><td>庚寅。是日春李御就遊初也。仍無結政。但内裏御物忌也。因之自夕部親往左大臣。大納言藤原懷忠卿。中納言同実資卿。参議同誠信卿。同公任卿行之。午後参着中納言平惟仲卿。参議藤原懷平卿。源俊賢朝臣。事了各退出。【本朝世紀】</td></tr><tr><td>10 27</td><td>癸巳。今日春李御就遊結願也。仍無尋常政。午型。内</td></tr></table>	正月	30	中宮大夫。【公卿補任】	2 9	癸巳。中納言平惟仲卿。參議藤原忠輔朝臣着行座聴政。	2 11	乙未。……巳刻。大納言藤原懷忠卿。中納言同時光卿。	2 19	癸卯。中納言平惟仲卿。參議藤原誠信卿。同公任卿着行座聴政。【本朝世紀】	2 20	甲辰。今日。廿余社奉幣。仍有八省院御座之事。左大臣(道長)。右大臣(公季)。大納言藤原道綱卿。中納言同時光卿。平惟仲卿。參議藤原懷平卿。同忠輔朝臣。同參議藤原平惟仲卿。參議藤原育信朝臣着行座聴政。【本朝世紀】	2 22	丙午。中納言平惟仲卿。參議藤原育信朝臣着行座聴政。【本朝世紀】	2 27	辛亥。……同時參口(奉七)日、女軍、同道上達部民部卿(藤原懷忠)、中宮大夫(平惟仲)、藤宰相(懷平)、左衛門督(藤原誠信)、宰相中将(藤原春信)、修理大夫(源俊盛)等。【御堂閤日記】	3 9	壬戌。午後。左大臣(道長)。右大臣(頭光)。大納言源時中卿。藤原道綱卿。中納言同時光卿。平惟仲卿。參議藤原公任卿。源俊賢朝臣着左仕座。【本朝世紀】	3 16	己巳。……巳一刻。左大臣(道長)。内大臣(公季)。大納言源時中卿。藤原道綱卿。權大納言同懷忠卿。中納言同実資卿。平惟仲卿。參議青原輔正卿。藤原誠信卿。同公任卿。同忠輔朝臣。同參議朝臣。源俊賢朝臣參入内裏。【本朝世紀】	3 20	癸酉、候仁王会、依御物忌、他公卿不候、外宿上達部候南殿(行事上右大将(藤原道綱)依有障、中宮大夫(惟仲)行之、事了退出。【御堂閤日記】	3 20	癸酉。天晴。今日臨時仁王会也。仍無尋常政。巳刻。	3 23	昔原輔正卿。藤原誠信卿。同公任卿。同参議朝臣。内裏参入行之。【本朝世紀】	7 23	丙子。天晴。上卿进参。仍無政。午後。中納言藤原実資卿。平惟仲卿。参議青原輔正卿。藤原誠信卿。同忠輔朝臣。同参議朝臣。源俊賢朝臣着左仕座。【本朝世紀】	7 27	庚寅、御諮經案願、依御物忌親候公卿余、民部卿(懷忠)、大(大)、皇大臣大夫(実資)、中宮大夫(惟仲)、宰相中将(春信)、源宰相(実資)等也。【御堂閤日記】	7 27	庚寅。是日春李御就遊初也。仍無結政。但内裏御物忌也。因之自夕部親往左大臣。大納言藤原懷忠卿。中納言同実資卿。参議同誠信卿。同公任卿行之。午後参着中納言平惟仲卿。参議藤原懷平卿。源俊賢朝臣。事了各退出。【本朝世紀】	10 27	癸巳。今日春李御就遊結願也。仍無尋常政。午型。内
正月	30	中宮大夫。【公卿補任】																																
2 9	癸巳。中納言平惟仲卿。參議藤原忠輔朝臣着行座聴政。																																	
2 11	乙未。……巳刻。大納言藤原懷忠卿。中納言同時光卿。																																	
2 19	癸卯。中納言平惟仲卿。參議藤原誠信卿。同公任卿着行座聴政。【本朝世紀】																																	
2 20	甲辰。今日。廿余社奉幣。仍有八省院御座之事。左大臣(道長)。右大臣(公季)。大納言藤原道綱卿。中納言同時光卿。平惟仲卿。參議藤原懷平卿。同忠輔朝臣。同參議藤原平惟仲卿。參議藤原育信朝臣着行座聴政。【本朝世紀】																																	
2 22	丙午。中納言平惟仲卿。參議藤原育信朝臣着行座聴政。【本朝世紀】																																	
2 27	辛亥。……同時參口(奉七)日、女軍、同道上達部民部卿(藤原懷忠)、中宮大夫(平惟仲)、藤宰相(懷平)、左衛門督(藤原誠信)、宰相中将(藤原春信)、修理大夫(源俊盛)等。【御堂閤日記】																																	
3 9	壬戌。午後。左大臣(道長)。右大臣(頭光)。大納言源時中卿。藤原道綱卿。中納言同時光卿。平惟仲卿。參議藤原公任卿。源俊賢朝臣着左仕座。【本朝世紀】																																	
3 16	己巳。……巳一刻。左大臣(道長)。内大臣(公季)。大納言源時中卿。藤原道綱卿。權大納言同懷忠卿。中納言同実資卿。平惟仲卿。參議青原輔正卿。藤原誠信卿。同公任卿。同忠輔朝臣。同參議朝臣。源俊賢朝臣參入内裏。【本朝世紀】																																	
3 20	癸酉、候仁王会、依御物忌、他公卿不候、外宿上達部候南殿(行事上右大将(藤原道綱)依有障、中宮大夫(惟仲)行之、事了退出。【御堂閤日記】																																	
3 20	癸酉。天晴。今日臨時仁王会也。仍無尋常政。巳刻。																																	
3 23	昔原輔正卿。藤原誠信卿。同公任卿。同参議朝臣。内裏参入行之。【本朝世紀】																																	
7 23	丙子。天晴。上卿进参。仍無政。午後。中納言藤原実資卿。平惟仲卿。参議青原輔正卿。藤原誠信卿。同忠輔朝臣。同参議朝臣。源俊賢朝臣着左仕座。【本朝世紀】																																	
7 27	庚寅、御諮經案願、依御物忌親候公卿余、民部卿(懷忠)、大(大)、皇大臣大夫(実資)、中宮大夫(惟仲)、宰相中将(春信)、源宰相(実資)等也。【御堂閤日記】																																	
7 27	庚寅。是日春李御就遊初也。仍無結政。但内裏御物忌也。因之自夕部親往左大臣。大納言藤原懷忠卿。中納言同実資卿。参議同誠信卿。同公任卿行之。午後参着中納言平惟仲卿。参議藤原懷平卿。源俊賢朝臣。事了各退出。【本朝世紀】																																	
10 27	癸巳。今日春李御就遊結願也。仍無尋常政。午型。内																																	
社会事項	正13 改為長保元年。 2 9 彰子着教、從二位。 ○閏月 惟仲(嫔子・尊子)、生昌閑連事項																																	







一 保 二	一 条	57	11 19	12 15	12 16	12 17	12 21	<p> (中) 披示云、先例直<sup>レ</sup>不供之時、先申案内、而今日所供飯少、極輕々<sup>レ</sup>所進不及例數、本所先申其由、待仰可進止、本<sup>レ</sup>在茲可減、亦可令間減、【權記】</p> <p> (公卿等中宮及び藤原懷平の五節所を訪ふ)</p> <p> 壬辰……公卿・殿上人等向中宮五節所、還聞右大將(藤原道綱、長卿)・<sup>レ</sup>中納言・平中納言・原道綱、殿上人相共到藤宰相<sup>レ</sup>(五節力)所、事了還侍本座、【權記】</p> <p> (東三茶院燒亡)</p> <p> 戊午……此夜東三茶院燒亡、<sup>三茶院</sup>移御左大臣土御門第、藏人忠隆為御使參<sup>レ</sup>(院力)・<sup>三茶院</sup>參内、候御前、申燒亡案内并可被奉院雜物事有例之由、亦申、如此之時有行幸也、縱不被遂行、必可令申事由、敗、即大藏卿奉仰參院、此夜<sup>レ</sup>(夜有九)・<sup>レ</sup>勅計云々、寅初罷出、又參院<sup>レ</sup>【權記】</p> <p> 戊午。東三茶院(註子)御所中納言平惟仲卿家有火。彼院為御方遠渡御之間也。今日。皇后宮定于於前日馬守平生昌朝臣宅。有御產事。皇女嫡子。【日本紀略】</p> <p> (前典侍邪靈のため狂亂し道長と發授す)</p> <p> 己未、宮々欲參内之間、下人云、皇后宮(藤原定子)御座已非常也云々、問察内、答不次由、仍令催參、頃之婦来云、事已美也、<sup>レ</sup>即忽參内之間、左府御隨身伴益志来達<sup>レ</sup>門<sup>①</sup>叮辺、示云、只今可參、即參入、命云、大率所進絹百疋可奉院、<sup>補昌榮</sup>又可遣仰山庭王許自今夜可候夜居之由、又皇言宮御事、世間作法<sup>レ</sup>知乱、奉賜大僧正(禮修、受護身、心神甚懶、參院之間、藏人(藤原)美房稱、勅使召大僧正、仰可參皇后宮奉加持御座者、今今朝所聞之言相違、為奇、<sup>源</sup>國奉朝臣<sup>②</sup>云、為院御使參入彼宮、此實終計已崩了之由、宮司等有所申者、美房之說似荒涼、參内、<sup>二人</sup>遂去<sup>③</sup>參院後、參御前、仰云、皇后宮已傾(傾力)逝甚悲、<sup>レ</sup>(左力)大臣可參之由只今可仰遣者、即差永光為使、此<sup>レ</sup>(間カ)願濟致參入、令奏云、院御座甚危急也、可然有駿健可令召奉給之由、左大臣令申者、此朝臣又以丞相命示<sup>レ</sup>(子力)云、院御座極重坐之内、又有非常之事、甚<sup>レ</sup>(可力)怖畏、只今可參院者、女房等云々(衍力)、前典侍為邪靈被狂、与大臣發授、其意氣忿怒不可謂云々、丞相出示此事之亂心神無主、<sup>レ</sup>(何)甚怖畏給之氣云々、……又來廿三日御修法<sup>レ</sup>(其期力)甚速<sup>レ</sup>以近日可令動申、又藤典侍被靈氣<sup>レ</sup>之体甚非常也、<sup>④</sup>又(道長)依院重坐近候床席之<sup>レ</sup>御足下之女房等有寢音、願見藤典侍捧<sup>レ</sup>手、取為靈所厭来也、【權記】</p> <p> (平惟仲を召す)</p> <p> 毎年……令遣召民部卿藤原朝臣之間進假文、仍又奏案内、遣召中納言平朝臣、此間善言進假文、奏覽、相待源宰相消息、已以無音、【權記】</p> <p> (惟仲を召す)</p> <p> (惟仲をとして皇后定子崩後の雑事を行はしむ)</p> <p> <sup>子子</sup>子子、依伏供養民部卿、藤中納言等、(遣送)平中納言、</p>
-------------	--------	----	----------	----------	----------	----------	----------	---

12	15	12	16
盤子内親王誕生	定子崩御。	詮子、惟仲邸様	詮子御怒。
		失により、道長	邪霊のため、
		邸に移御。	道長と拏掇。
			盤子

長保二 一條	一條	58	正 24	○	○	3	○	20	29	<p>而戸部（懷忠）、藤納言申障、……仰出給如時、平中納言被遣值所、大外記善信朝臣来告制皇宣官權大連（藤原）惟通參於陣外、<span style="border: 1px solid black; padding: 0 5px;"> </span>（今申カ）故當（定子）遵命、申其旨、申（符乃）左大臣、々々披仰可告下官之由者、依召參上、奏平中納言參由、被仰云、皇后崩後惟尋為令行之所令召也、其由可告仰者、中納言奏勅、……皮剋平中納言令奏云、警固管符三〇、【權記】 庚午……申剋平中納言參入、【權記】 壬申……申剋平中納言參入、【權記】</p>
長保二 一〇〇〇	一條	57	正 24	○	○	3	○	20	29	<p>大宰權帥（或本云、給左右近衛各二人為隨身）。【公卿補任】 惟仲任帥之時（長保三正廿四兼任于之中納言平氏）、為尊親王任他官、其所任之、或人云、如帥太寺等者、為親王所置之官也、仍以諸臣等任權帥、未有任正員之例云々、今按、太寺可然、至帥非為親王所置、但權帥有例、何強任正員乎、 隨身者、帥進請文、有宣旨、仰近衛兵衛四府、令進奏文、次給宣符、（内印）每府二人、（合八人）、有國未上道之前、惟仲下向、是不可然歟、見度々見（召） 〔平惟仲今年初めて政に著す〕 乙巳 參禰政、平中納言（惟仲）今日初署政、【權記】 （定子）御忌のほども過ぎぬれば、院には、今日明日今宮（皇子）迎へたまふらんとして、三条院に出でさせたまふ（2／10）。事ども果てなば、姫宮、一の宮などは内裏に招けしませんと思したれど、帥殿などとはやすく見えてまつりたまふまじければ、それぞ之内にも心苦しめされける。女院には、吉日して若宮迎へだてまつらせたまふ。帥殿、中納言殿なども御送りにもと思しめせど、まだ思のうづなるつたにも、ちやうまいましましうつつましい思はるほどに、御迎へに藤三位、さるべき女房など、院の殿上人あまたしく御迎へに参れば、渡らせたまふ。【采花物語・卷第四十七とて野】三三三（一七）（2） （皇威に依る祈雨奉幣） 壬戌 参内、赴桃園、詣東院、帰宅、依 勅仰平中納言祈雨使依（被乃）奉二社（町生・貴布祢）事、以藏人可為使、仍又仰兼宣、【權記】 （行成世尊寺供養す）</p>



長保三 一〇〇一		河内国 豊田庄壹処 已上肆所 院家納院用、但家女々子相知〔其力〕可 沙汰、 右以前家地庄牧施入知件、各住右状、家女々子相共、 隨番〔應〕豐可沙汰、不可違失、 長保三年六月廿六日 中納言兼大宰帥平朝臣惟仲○惟仲ノ手印ニテ披露ス 【平安道文】 かかるほどに、女院ものなせたまひて、留ましう思 しめしたり。(中略)日ころはただ過ぎに過ぎまてい ぬ。御物の怪を四五人に駈り移しつゝ、おのおの僧と ものしりあるに、この三茶院の隅の隅の祟りとい ふことさへ出で来て、そのけしきいみじうあやにくげ なり。「恐ろしき山には」と言ふらんやうに、いとど しきだ、かかることさへあれば、所を替へさせたまふ べきなめりといふこと出で来て、御占にもあふ所は、 惟仲の帥中納言の知る所に渡らせたまふべき御定めあ り。やかてその日行幸あるべし。【栄花物語・巻第七 「とりて野」三回七べ一ツ】(4)	○	2 1	10	36	8 1	11 9	(紙屋長上の解文を史に付す) 丁卯、前但馬守(平生昌)来、志與賴柳百把、召(小槻) 泰親宿禰、村兼渡國紙屋長上平保良信解文、【権記】 (萬三茶院七々日忌御法会) 丙子、有御法事、以寶殿為御堂、誦経物三千七百端云 々、……御匣殿女御(藤原尊子)百端、【権記】 壬戌……尾張寺(大江)匡衡朝臣進一宮当年御封代精 王足、即付道行朝臣、々々示帥中納言(平惟仲)妻重 (藤原繁子)消息、【権記】 (為尊親王七々日忌御法事 行香) 甲子、故彈正言(為尊親王)御法事、……行香(藤原) 中清・(源)泰職・(平)平生昌等大夫、【権記】 戊子……直物云々、備中介(平)生昌朝臣、【権記】 (高物)	長保四 一条 59	長保三 一条 58
長保三 一条									6 3 道隆四女(御匣殿)卒。 8 3 東宮女御原子女 9 14 隆家雄中納言	長保四 一条 59	長保三 一条 58

(4) 惟仲は詮子によく仕えており、妻・繁子は詮子の叔母で、かつ女房でもあった人物なので、詮子の惟仲邸への遷御は以前にもあったが、この遷御は、他書にみえない。また、『栄花物語』によると、詮子が崩じたのも惟仲邸となるが、当時、惟仲・繁子はともに大宰府に下向している。『権記』・『日本紀略』・『扶桑略記』(長保三年閏十二月二十一日条)によると、詮子が崩じたのは行成邸となる。